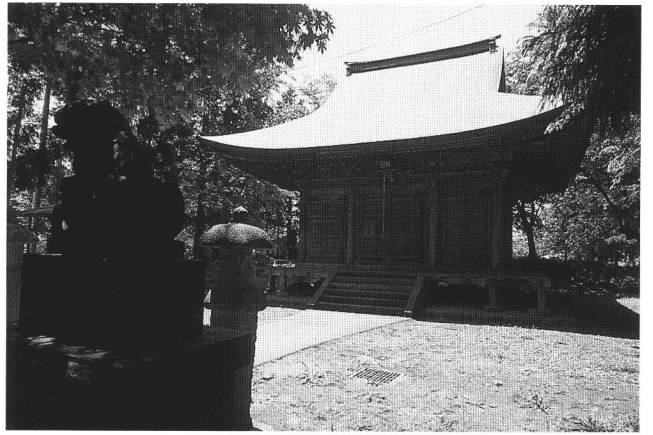


建久8年(1197)の開山で、かつては
医王山薬師寺と称した常福院薬師堂
(国重要文化財指定)



と区別がつきにくいものもあるのだが、村重要文化財指定の佐賀瀬川横穴古墳群は一目瞭然である。昭和三十一年(一九五六)七月二五日、一六日と襲った台風9号は豪雨をもたらした、新鶴村も大水害となった(本誌二〇頁参照)。この時に盆地西部の山地には多数の山崩れが発生したのだが、向山の山壁も表土崩壊し、合計九基の横穴が現われた。この古墳群は七世紀末頃の古墳時代末から奈良時代にかけてのもので、環頭の直刀一振りと鉄斧一個、人骨が一基から四、五体分ほど出土し、古墳が単に首長だけではなく、家族等が追葬されたことがうかがわれるという。

これら夥しい数の古墳群は何を語るのか。『村誌』には新鶴村の古墳時代の意味について、「佐賀瀬川扇状地の水田開拓時代、豪族による各部落の統制、新移入宗教である仏教の普及と古墳構築の文化発達の黎明期に相当し、これが扇状地末端まで及んでいたことを知るのである」としている。

黎明はやがて着実に新鶴文化として開花していく。新鶴村最古の建造物として国重要文化財指定を受け、扇状地末端の新屋敷にその重厚な姿で鎮座している常福院薬師堂(田子薬師堂)を見ると、確かに、新鶴村の文化の精華がここに極まったかのような感を覚えた。

長い佐賀瀬川紀行も終わりに近づいた。高かった陽も黄金色の斜陽に変わり、唐澤さんの表情にも幾分か疲労がにじんだ。それでも

最後に、もつとも好きな場所という衣方崎に行き、収集整理した石器の箱を持って記念撮影に応じてもらった。この地は弘法大師の殺生禁断祈願の伝承もある景勝地で、長尾原を迂回する佐賀瀬川の突端にあたる。背後には夕陽を映す水張り田——唐澤さんの顔に、新鶴人の確固たる誇りが浮かんだ。



佐賀瀬川的美田を背景に衣方崎に立つ唐澤正義さん